

# 社会的世界における「ジャーナリズム」的行為の構築 A. シュッツの現象学的社会学による一考察 Construction of Journalism as Action in the Social World A Review from the Perspective of Phenological Sociology

山口 仁<sup>1</sup>

Hitoshi YAMAGUCHI

<sup>1</sup>帝京大学文学部 Teikyo University, Faculty of Liberal Arts

**要旨**…構築主義的視座は、マス・コミュニケーション研究/ジャーナリズム研究においては、主として「マス・メディア報道によって構築・構成される現実」を把握するために用いられてきた。しかし、構築主義の一つの起源とされる現象学的社会学（例：アルフレッド・シュッツ）の議論では、人々がお互いの行為に意味を付与し理解しあい、また自分自身の行為も理解する、そのメカニズムの解明に関心が払われてきた。この問題関心をマス・コミュニケーション研究/ジャーナリズム研究に当てはめると、「どのようなコミュニケーション行為がジャーナリズムとして構築・構成されているのか/されてきたのか」というもう一つの構築主義的視座の適用の仕方があることが明らかになる。

**キーワード**（社会的）構築主義、現象学的社会学、現実、ジャーナリズム

## 1. はじめに

本稿の目的は、マス・コミュニケーション研究/ジャーナリズム研究の中に、社会問題研究をはじめとする様々な社会学の領域で提唱されてきた（社会的）構築主義の視座が適用・展開できる新たな領域が存在するかどうか考察することである。

構築主義に関しては、V.バーが著書『社会的構築主義への招待』の中で「哲学、社会学、言語学などを含む、多くの学問から影響を受けており、本質的に学際的（バー1997：2）」と述べているように、事物は社会的に構築されるという視点を持つ様々な諸研究が「構築主義的」と評されてきた。一方このような広範なとらえ方は、様々な構築主義的研究の間の差異を見落としかねないという問題も内包している。もちろん1980年代中盤の米国で生じ、その後の日本でも展開された構築主義論争のように、「正統な構築主義・正しい構築主義」を探求することは、それほど意義があることではないかもしれない（平・中河編2000参照）。とはいえ、構築主義的研究の多様性を認めるのであれば、それぞれの研究が何を対象とし、その結果どのような知見をもたらしてきたのか（できるのか）、一定程度明確にする必要がある。マス・コミュニケーション研究/ジャーナリズム研究において、構築主義的視座を応用・展開する際にも同様である。

本稿では、まず現在のマス・コミュニケーション研究/ジャーナリズム研究における構築主義的視座の適用・展開の状況を検討する。そして構築主義の一つの起原とされるアルフレッド・シュッツを中心とする現象学的社会学の議論を踏まえながら、構築主義的視座がどのような目的で主張されていたのか、どのような研究対象を設定しうるのかを検討する。そしてマス・コミュニケーション研究/ジャーナリズム研究において、構築主義的視座を適用可能な新たな領域を明らかにしていく。

## 2. 二つの「現実の構築・構成」

(1) マス・メディア報道による「現実の構築・構成」

マス・コミュニケーション研究においては、構築主義的視座はマス・メディア報道（特にニュース）の分析に関して適用されてきた。マス・メディアは報道（論評や解説も含む）を行う過程で、事件・出来事の中の特定の事実に着目し、それらを取捨選択し、ニュースとして纏め上げる。このようにマス・メディアはニュース報道を通じて事件・出来事を定義し、それらに意味を付与することで、特定の現実を構築・構成しているという見解が広く展開されてきた。

D.マクウェールは、マス・コミュニケーション研究における構築主義的視座の基本原則として以下の五点を挙げている（マクウェール 2010：132 参照）。①社会とは固定した現実というよりは構築されたものである、②マス・メディアは現実を構築するための素材を提供する、③マス・メディアは意味を提供するが、その意味は交渉されたり拒絶されたりすることもある、④マス・メディアはある特定の意味を選択的に再生産する、⑤マス・メディアは社会で生じた現実を客観的に報じることはできない（すべての現実解釈されたもの）。同様に S.バラン=D.デイビスは、人々が現実を典型的に意味付けすること、さらにその類型をマス・メディアが提供していることを指摘している（バラン=デイビス 2003、354-358 参照）。彼らによる構築主義的視座の整理では、人々が選択的・典型的に現実を意味付けし理解していること、さらにその意味付けに対してマス・メディアは大きな影響力を持っていること（人々はマス・メディアに大きく依存していること）が強調される。

ただしマス・コミュニケーション研究においては、「構築主義」と明示しなくても、同様の視座に基づいた研究は古くから存在してきた。その一例が以下の疑似環境論による指摘である。

人々と現実環境 (real) との間には、現代においては、膨大に象徴化された環境、すなわち疑似環境 (pseudo) が挿入されている。そして、人間は疑似環境を手掛かりにして、それを通じて、現実環境へと適応の行動を行うのである。だが、この象徴化された疑似環境を通しての現実環境への対応において、人間はあまりにも多く疑似環境に依存しすぎることによって、逆に現実環境に裏切られる（藤竹 1968：23-24）。

さらに類似の指摘は、W.リップマン（1922）のステレオタイプ論の中にも見出すことができる。

われわれはたいいていの場合、見てから定義しないで、定義してから見る。…騒がしい混沌状態の中から、すでにわれわれの文化がわれわれに定義してくれるものを拾い上げる。そうしてこうして拾い上げたものを、われわれの文化によってステレオタイプ化されたかたちのままで知覚しがちである（リップマン 1922：111-112）。

これらの議論に共通するのは、マス・メディアの報道では事件・出来事がそのまま客観的に伝えられることはなく、その過程においては事実の取捨選択およびその事実の関連付けが行われていること（＝マス・メディアによって現実が構築・構成される）への言及である。このような視点は、マス・メディアの報道に対して何らかの形で批判的な立場を採用する研究とも親和性が高い。バーは構築主義的視座の要件として、①明示化された知識への批判的スタンス、②（知識の）歴史のおよび文化的な特殊性、③知識は社会によって支えられている、④知識と社会的行為は相伴う、を挙げている (ibid:3)。バーが言う「知識」を、「ニュース（内容）」と置き換えれば、疑似環境論やステレオタイプ論の中にも構築主義的視座が含まれていると解釈することは十分可能である。

## (2) マス・メディア報道をとりまく「現実の構築・構成」

構築主義的視点を取り入れたマス・メディア研究として評価される G.タックマンも、上記の議論と同様にマス・メディア報道による「事件・出来事に対する意味付与」への言及を行っている。しかし彼女の議論を詳細に見ていくと「もう一つの構築・構成」への言及していることが分かる。

ニュースは社会的意味を定義、再定義し、社会的意味を構成、再構成するだけではない。ニュースは物事のやり方、あるいは既存の制度における既存の手続きを定義、再定義、構成、再構成するのである（タックマン 1990：266、傍点は引用者が追加）。

この引用箇所の後半部では、ニュースによって「既存の制度」や「既存の手続き」が構築・構成されていくことについて触れられている。そして制度について、タックマンは以下のように述べている。

ニュースが公認された制度にどっぷりつかっていること、ニュースが中央集権的に収集されていることを、19世紀から受け継いだ特質としてわれわれは当たり前になっている。そして制度にどっぷりつかっていることが、ニュースの新しい形が生まれるのを妨げていることにわれわれは気がつかない（タックマン 1990：265）。

このように特定のスタイルのニュース生産が繰り返し行われることで既存の制度が正当化され、固定化していくことで、ニュースは新しい形を容易には取りづらくなる。タックマンは自著『ニュース社会学』の位置付けを「仕事および職業についての社会学（タックマン 1990：295）」と述べているが、「制度にどっぷりつかっていること」で、特定のスタイルがニュース生産のあり方として自明視されていく過程を批判している。

このような過程で構築・構成されているのは、ジャーナリズムの規範・理想や取材手法や編集方法、そして表現手法などといった「ジャーナリズムのあり方（ジャーナリズム観）」である。この「ジャーナリズム観」は、その生産者・送り手であるマス・メディア（とそこで働く記者）はもとより、その受け手である社会の人々、ときにはジャーナリズムの規制に関与する国家・政府の間で部分的に共有されている。そしてある「ジャーナリズム観」が支配的になり、特定のジャーナリズムのあり方が正当化され、それ以外のあり方は排除されていく。

このように考えるとタックマンの議論の中には、疑似環境論などと問題関心を共有する①事件・出来事に対する意味付与としての「現実の構築・構成」のほかに、②ジャーナリズムのあり方（＝マス・メディア報道をとりまく「現実の構築・構成」）というもう一つの過程への関心が含まれていることが分かる。ではこれらの①と②の構築過程は、構築主義的視座によってどのように再評価・整理することができるだろうか。

### 3. 行為をとりまく現実の構築

#### (1) 現象学的社会学における構築主義的視点

構築主義の起源をどこに求めることができるのかという議論に関しては、様々な論者が多様な見解を提示しているが、それを明確に画定することは困難である。ただし、マス・コミュニケーション研究においては、現象学的社会学にその起源が求められてきたと考えられる（アドニ＝メイン 2002、大石 2005 参照）。その中でも、アルフレッド・シュッツと彼の影響を受けたピーター・バーガーとトーマス・ルックマンの著書『現実の社会的構成』に対する言及は欠かせない。特に「現実とは社会的に構成（construct）されており、…（中略）…この構成がおこなわれる過程を分析しなければならない（バーガー＝ルックマン 1966＝2003:1）」は、構築主義的視座に見られる典型的な見解である。そして彼らが「大きく負っている（ibid：23）」のがシュッツの議論である。

世界についてのわれわれの知識はすべて、すなわち科学的な思考における知識はもとより常識的な思考における知識もまた、構成概念を必要とする。つまりあらゆる知識は、思考（思惟）の組織化のそれぞれの段階に特有な一連の抽象化、一般化、形式化、理念化を必要としている。純然たる事実といったものは、厳密に言えば存在しない。事実とはすべてははじめから、われわれの精神の諸活動によって全体の文脈から選定されたものなのである。したがって事実とはつねに、解釈された事実なのである。…われわれは世界の或る（ある）特定の側面（相）を把握しているに過ぎないということだけである。すなわちわれわれが把握するのは、みずからの生活を営んでいくという観点からみて、もしくは科学の方法と呼ばれる、一連の思考手続きのうえで是認された諸基準の観点から見て、関連がある特定の側面を把握しているということである（シュッツ 著作集第1巻：50-51）。

シュッツの議論の特徴は、自明視されたものに対する懐疑の視点の他に、①科学や理論に対するペシミスティックな視点を持っていること、②日常生活世界を主題化していることである（吉澤 2002：15-16 参照）。①に関しては、シュッツは科学理論が世界を理解するための唯一の方法という考え方を批判し、現実世界を理解する方

法は「科学理論」以外にも存在すると指摘する。ある知識を用いて物事の抽象化して考えたり、複数の事物に共通点を見出して一般化したりするのは、社会理論家に限らずあらゆる人々が行っている。つまり社会理論に向けられたシュッツのペシミスティックな視点とは、科学や理論の正当性そのものに対してではなく、世界を理解しているのは科学者・理論家だけであるという考え方に対して向けられていたのである。そしてシュッツは理論家ではない「普通の人々」が日常生活の中で自分達が存在する世界を理解し、それに意味付与していることを強調していた。この考え方は、シュッツの議論のもう一つの特徴である②日常生活世界の主題化を導いていく。

## (2) 社会的行為に関する現実の構築・構成

シュッツが、「普通の人々」が日常生活において行う世界の理解に着目したのは、日常世界を理解することが人間の行為を遂行に際しては必要不可欠であると考えていたからである。すなわちシュッツは人間を意識する存在、もしくは周囲の環境を理解する存在としてとらえおり、以下のような問いを設定する。

この社会的世界は、そのなかにいる被観察者としての行為者にとって何を意味しているだろうか、またその行為者は、その社会的世界の中で行為することによって何を意味していたのだろうか（著作集3集：24）

そして「人々がお互いを理解し合い自分自身をも理解する、その活動のメカニズム（著作集3集：24）」の研究を試みる。

人間の行為が遂行される過程においては二種類の理解・解釈が行われている。まず行為者が自らの経験・体験を解釈する「自己解釈」である。行為者は継続的・持続的に諸々の経験をしている。ただしこの段階の体験は明確な認識において行われているのではなく、多くの場合は無意識的に積み重ねられている。そして行為者は、この積み重ねられた経験に対して反省的な視点を向けることで「体験を体験する（森 1995a, 151）」。

すなわち、行為者は意識的に特定の体験に着目し、着目した体験をそれぞれ関連させ意味を付与する。そしてこの過程では体験を解釈・理解するために知識が解釈図式として作用する。こうして行為者は自らの体験を自己解釈する。一方、その行為者を見る他者もまた行為者のふるまいに意味を付与する。すなわち、行為者のふるまいの中から特定のふるまいに着目し、それらをそれぞれ関連させて理解・解釈を行う。このようにお互いの理解・解釈が重なり合ったとき、行為者に対して共通の意味が付与される。

ただしこのような日常生活における世界の理解の仕方は、(1)整合性に欠け、(2)部分的にしか明晰ではなく、(3)矛盾から全面的に開放されておらず、その社会を構成する人々にとっては理解しあうのに十分な整合性と明晰性と一貫性が確保されているにとどまっている（著作集3巻：136-137）。とはいえ、彼らがお互いを理解し合うにはそれで十分なのである。なおこのような解釈・理解は、個人が自由に出来るものではない。解釈図式のうち、個人が独自に作り出すことができるのはほとんどなく、その多くは人々が存在する社会から習得するものである。

私は、この組織された社会的世界のなかにいけば生みこまれたのであり、そしてこの世界のなかで成長してきたのである。私は成長や教育を通じて、また様々な体験や試みのすべてを通して、この世界とそれに伴う様々な制度について、十分に定義されたものではないにしろ一定の知識を習得している（著作集3集：26）。

この知識を共有している者達は、お互いの行為を理解・解釈し合うことが可能である。すなわち、行為者は自らどのような行為をしているのか理解・解釈し、他者もそれを同じように理解・解釈していることを想定できる状況が形成される。このようなシュッツの指摘は、あらゆる日常生活の場に適用できることができる。

## 4. 「ジャーナリズム」の構築・構成

以上のシュッツの議論を、マス・メディア報道の活動（記者の活動を含む）に適用すると、以下のような見解を導き出せるだろう。すなわち彼らはマス・メディア組織に入ると、ニュースの取材・執筆はどのように行われるべきか（例えば、どこに取材に行ったらよいのか、どんな事件・出来事にニュース・バリューがあるのか、どんなスタイルで報道すればよいのか、その過程ではどんな倫理・道徳が求められるのか）ということ公式・非公式に習得していく。そして自己や他者（同僚・同業者）の活動を理解・解釈し、特定のコミュニケーション行

為に対して「ジャーナリズム（的行為）である」と意味付与していく。こうしてジャーナリズム的行為が存在する「ジャーナリズムがある世界」とでもいうべき一つの社会的世界が構築・構成される。その中で自己や同僚・同業者を「ジャーナリスト」として位置付ける。前述のシュッツの引用箇所当てはめれば、「（記者は）組織された社会的世界（＝ジャーナリズムの世界）のなかにはいわば生みこまれたのであり、そしてこの世界のなかで成長してきたのである。私（＝記者）は成長や教育を通じて、また様々な体験や試みのすべてを通して、この世界（＝ジャーナリズムの世界）とそれに伴う様々な制度（ジャーナリズムに関する制度や規範）について、十分に定義されたものではないにしろ一定の知識を習得している（カッコ内、引用者追記）」ととらえ直せる。

もっともジャーナリズムのあり方に言及する、すなわち「ジャーナリズムの世界」を構築・構成するのは、当事者である記者だけではなく、ジャーナリズム研究者やジャーナリズム教育を担う者も含まれている（Jorgensen and Hanitzsh 2009 参照）。ただし、ジャーナリズムの研究者や教育者との間で「何がジャーナリズムであるか？」という問いに関して完全な一致は存在しない。それぞれが互いの議論に対して批判的な見解を述べあっているという指摘もある（Zelizer 2009 参照）。ゼリザーによれば、明確な定義が与えられないまま「ジャーナリズム」という概念が用いられ議論が展開されてきたという。そして（マス・）メディア環境、政治的、経済的、社会的環境が刻々と変化する中で、「ジャーナリズム」と呼べるような行為や活動に注目が集まり、様々な立場から統一性のない概念や知識をもとにした「ジャーナリズム研究」が展開されてきたとゼリザーは指摘する。

さらに研究者・教育者以外にも、政府、特定の利害関係者、一般市民などがジャーナリズムのあり方に言及し、ジャーナリズムの担い手とされるマス・メディアに対して規範的な役割を期待してきた（マクウェール 2010：214-216 参照）。それらの見解の間には共通点がある一方、不一致の部分も数多く存在している。だが、様々な主体がジャーナリズムのあり方に言及し、その過程で「ジャーナリズム」および「ジャーナリズムの世界」の構築・構成が行われていることには変わりがないだろう。

以上の議論を総合すると、ジャーナリズムという社会現象に関しては、二つの「現実の構築・構成」の過程が存在することが分かる。第一に、マス・メディアが報道を行う過程で事件・出来事へ意味が付与されるという点での「現実の構築・構成」過程である。第二は、社会の様々な主体がそのような活動に対して「ジャーナリズムである（ではない）」と意味付与していく過程である。

## 5.（メディア）言説による「ジャーナリズム」の構築・構成

前節までの議論をもとに考えると、現在数多く行われている（規範的な）ジャーナリズム論（＝ジャーナリズム批判）とは「ジャーナリズムの世界」を構築・構成する活動の一種としてとらえることが可能になる。なお一部の研究者は、そのようなジャーナリズム論に対して「コンセンサスを欠いた、独りよがりな規範理論としてのジャーナリズム論、『論』を自称しながらも『理論』を欠いたジャーナリズム論が横行しているのではないか（大井 2003：127）」という批判を行っている。さらにそのようなジャーナリズム論が、固定化した視座のまま定型化された批判を繰り返してきたという批判的な指摘も存在する（大石 2005：51 参照）。

このような指摘には納得できる箇所も多い。だが本稿の問題関心に従えば、それは異なった角度から「ジャーナリズム批判」を扱うことも可能である。つまり「ジャーナリズム批判」を不備あるジャーナリズム研究としてではなく、「ジャーナリズムの世界」を構築・構成する活動の一種としてとらえ直すということである。「ジャーナリズム批判」は、多くの場合（メディア）言説の形態をとっている。したがって社会で行われている「ジャーナリズム批判」は、「ジャーナリズムに関する既存研究」としてよりも、「ジャーナリズム」の構築・構成を考察する際の「研究対象」と位置付けることが可能なのである。

（メディア）言説を研究対象に設定するのは、別段珍しいことではない。むしろマス・コミュニケーション研究では、マス・メディア報道の中で用いられたテキスト、その過程における言説編成を分析し、どのようなフレーミングが行われたのかを明らかにしてきた。現実の構築・構成過程を分析する手段として、言説分析は優れている。「ジャーナリズム」の構築・構成過程の分析においても同様である。その過程で編成される言説に着目することになるだろう。前述のゼリザーは、ジャーナリストがジャーナリズムのあり方についての語るときに、そこには特定のパターンがあらわれてくると指摘しており、例えば彼らが執筆したマニュアル本、もしくはジャーナリズムに関する「キャッチフレーズ」の中にそのようなパターンを見出すことができるとしている（Zelizer

2004:30)。日本社会においても同様である。例えば、新聞各紙は「新聞週間」などの特定期間にジャーナリズムのあり方について特集を組む。さらに国家・政府、大企業、その他の機関・組織などによって報道が制限・侵害・抑圧されそうになったとき、もしくはマス・メディアが社会問題の当事者（特に名誉棄損や風評の加害者）となった場合には、報道の中でジャーナリズムのあり方が自己言及的に語られる。このようなとき、マス・メディア報道によって「ジャーナリズム」・「ジャーナリズムの世界」が構築・構成されると考えることができる。また『新聞研究（日本新聞協会）』、『月刊民放（日本民間放送連盟）』『放送研究と調査（NHK 放送文化研究所）』のように、マス・メディア関連団体が発行する媒体においても、定期的にジャーナリズムのあり方に関する記事が執筆されている。それに加えて、インターネットの普及により一般市民の情報発信が容易になった現代では、ネットのあらゆる場所でジャーナリズムに関する言及が行われているのを確認することは極めて容易である。

以上のように「ジャーナリズムの世界」は、ジャーナリズム批判といわれる活動によって日常的に様々な領域において構築・構成されている。そしてこの過程を構築主義的研究の新たな分析対象として設定することは十分可能であると考えられる。

## 参考文献

- アドーニ,H.=メイン,S. (1984=2002) 大石裕訳「メディアと現実の社会的構成」谷藤悦史=大石裕編訳『リーディングス 政治コミュニケーション』一藝社
- バラン,S.=デイビス,D. (2003=2007) 宮崎寿子監訳『マス・コミュニケーション理論』新曜社
- バーガー,P.=ルックマン,T. (1966=2003) 山口節郎『現実の社会的構成』新曜社
- バー,V. (1995=1997) 田中一彦訳『社会的構築主義への招待』川島書店
- 藤竹暁 (1968) 『現代マス・コミュニケーションの理論』日本放送出版協会
- リップマン,W. (1922=1987) 『世論』岩波書店
- マクウェール,D. (2005=2010) 大石裕監訳『マス・コミュニケーション研究』慶應義塾大学出版会
- 森元孝 (1995a) 『モダンを問う』弘文堂
- (1995b) 『アルフレート・シュッツのウィーン』新評論
- (2001) 『アルフレッド・シュッツ』東信堂
- 西原和久 (1998) 『意味の社会学』弘文堂
- 大井真二 (2003) 「コミュニケーションとジャーナリズム」鶴木眞編『コミュニケーションの政治学』慶應義塾大学出版会
- 大石裕 (2005) 『ジャーナリズムとメディア言説』勁草書房
- スプロンデル,W.編 (1997=2009) 佐藤嘉一訳『社会的行為の理論論争 シュッツ=パーソンズ往復書簡 改訳版』木鐸社
- シュッツ,A. (1932=2006) 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』木鐸社
- 「人間行為の常識的解釈と科学的解釈」M.ナタンソン編、渡部光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻 社会的現実の問題[I]』マルジュ社
- 「社会的世界と社会的行為理論」A.プロダーセン編、渡部光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集 第3巻 社会理論の研究』マルジュ社
- 平英美・中河伸俊訳 (2000) 『構築主義の社会学 リーディングス』世界思想社
- タックマン,G. (1978=1990) 鶴木眞他訳『ジャーナリズム社会学』三嶺書房
- 吉澤夏子 (2002) 『世界の儂さの社会学』勁草書房
- Wahl-Jorgensen,K. and Hanitzsch,T. eds. 2009 *The Handbook of Journalism Studies*, Loutredge
- Harcup, T. 2009, *Journalism*, SAGE
- Zelizer, B. 2004 *Taking Journalism Seriously*, SAGE
- 2009 “Journalism and the Academy” Wahl-Jorgensen,K. and Hanitzsch,T eds. pp29-41